会津八一と恩師平野秀吉

槇田善衛

一．はじめに

会津八一の中学時代に焦点を当てて論を進めることにする。とくに、八一の学友と進路、影響を受けた国語教師および教科書について、新たな資料に基づいて考察したい。その結果、会津八一の中学時代の動向とその恩師平野秀吉の関係を明らかにできるはずである。さらに、有恒学舎の英語教師として採用された経緯についてもふれる。

二．会津八一が学んだ中学校の名称、学友および卒業後の進路

『青山百年史』によれば[1]、「明治二十六（一八九三）年三月十二日に新潟縣尋常中學校開校式を挙行す」「明治三十二（一八九九）年四月一日に新潟縣中學校と改称す」「明治三十三（一九〇〇）年四月一日に新潟縣新潟中學校と改称す」とあるため、この表記にならって会津八一の経歴を整理する。会津八一が明治二十八（一八九五）年四月に入学したときの中学校名は「新潟縣尋常中學校」であり、「新潟縣尋常中學校入学」となる。また、明治三十三（一九〇〇）年三月に卒業した時の中学校名は「新潟縣中學校」である。この校名は明治三十二（一八九九）年四月一日から明治三十三（一九〇〇）年三月三十一日の一ヶ年のみ使用された中学校の名称であり、八一はまさにこの一ヶ年のみに使用された学校名の卒業生となる。つまり、会津八一の正式な学歴は「新潟縣尋常中學校入学」「新潟縣中學校卒業」となる。

また、会津八一は第七回卒業（明治三十二年三月卒業）となっており[2]、「本學年ノ卒業生ハ四十二名」とあることから、同期卒業生は八一を含め四十二名である（表1）。その名簿の中には、「桂逸策」（郡市・族籍：中蒲原郡士族、卒業後の状況：自営）や「田崎義介」（郡市・族籍：北蒲原郡平民、卒業後の状況：高等商業學校）や「長谷川轍」（郡市・族籍：岩船郡士族、卒業後の状況：自営）や「野上俊夫」（郡市・族籍：新潟市平民、卒業後の状況：第一高等学校）や「山内保次」（郡市・族籍：新潟市平民、卒業後の状況：士官候補生）の名がみえる。会津八一の年譜ノート[3]によれば、「一八九六（明治二十九）年、新潟中學二学級となる（田崎仁義等編入試験に合格して同級となる）」「一九〇二（明治三十五）年、長谷川轍、安部邦太郎と三人にて牛込原町の素人屋玉川方に下宿す」とあり、田崎、長谷川はともに同期卒業生であることが明らかとなった（表1）。さらに、『會津八一伝』によれば[4]、「京都大学心理学教授　野上俊夫博士（上海の日語学会の鄭君平は博士門下の俊才であった）陸軍少将　山内保次等があった。殊に山内保次はこの時以来没するまで六十年余年間の無二の親友で

1　新潟県立新潟高等学校『青山百年史』新潟高等学校創立百周年記念実行委員会,1992,pp.894-897。

2　新潟縣新潟中學校『新潟縣新潟中學校第六年報』新潟縣新潟中學校,1900,pp.58-59。

3　会津八一『会津八一全集 第十一巻』中央公論社,1982,pp.500-502。

4　吉池進『會津八一伝』会津八一先生伝刊行会,1963,p.83。

あった」と記載されている。また、会津八一の「卒業後ノ状況」は「国民英学会」（表1）となっているが[5]、年譜ノート[6]の「一九〇〇（明治三十三）年　二十歳　三月新潟中學を卒業。四月東京に出づ。六月根岸に正岡子規を訪ふ。牛込に尾崎紅葉を訪ふ。（不在）七月新潟に歸る。（東京にて脚気を病み入澤達吉の診を受く。）正岡子規に良寛歌集を送る」では、「国民英学会」の名は見当たらない。八一が東京に出た本当の理由は「国民英学会」入学のためであり、脚気に掛かり結果として帰省せざるを得なかったのではなかろうか。本考察は既に蒲原宏氏が新潟日報で指摘しているので、次に紹介する[7]。「約四ヶ月の間、『一高受験を目指して勉強した』とあるだけで、どこの学校で勉強していたのか会津八一伝を手がけている人たちはふれていない」とし、（会津先生は）「英語の実力が優秀なのでさらに力を付けようと国民英学会に入学したのにちがいない」と指摘し、さらに「国民英学会が予備校的性格もあったので、プライドの高い先生としては触れたくない過去だった」と結んでいる。

三．会津八一と中学時代の国語教師について

会津八一は「『鹿鳴集』後記」[8]の中で、第五学年のときに「俄か作りの万葉学者」となり、良寛の歌は万葉調だと感嘆している。会津八一に良寛と万葉集が結びつくことに気付かせた「国語教師」として、三名の教師（平野秀吉、西脇又作、小串隆）を挙げ、そのうち平野秀吉がその有力な候補者だと述べた[9]。その三名の教師の動向に関する記載を見つけたので、次に紹介する。

（一）会津八一が入学した（第一学年）、明治二十八年度（明治二十八年四月より同二十九年三月に至る一年間）の記載について[10、11]

①平野秀吉に関する記載について

「明治廿八年九月十三日本縣平民平野秀吉生徒ノ教諭ヲ嘱託（月俸拾五圓）セラル」「明治廿九年二月廿五日嘱託教員平野秀吉助教諭（月俸貳拾圓）ニ任シ」とあり、平野秀吉は明治二十八年九月十三日に嘱託となり、同二十九年二月二十五日に助教諭になったことが明らかとなった。また、平野秀吉は国語教員免許状所有（新潟県平民）とあり、学科は「国語」「習字」と記されていた。

②西脇又作に関する記載について

「明治廿九年二月廿六日福島縣尋常師範學校助教諭西脇又作教諭（月俸参拾五圓）ニ任セラル」とあり、西脇又作は平野秀吉より半年遅れで福島県尋常師範学校助教諭から教諭として採用されている。また、西脇又作は哲学館卒業、倫理、歴史教員免許状所有（新潟県平民）とあり、学科は「歴史」「地理」「習字」と記されていた。このことから、

5　前掲2,p.59。
6　前掲3,p.501。
7　蒲原宏『ようやく解けた〝空白の4ヶ月〟』、新潟日報（日刊）平成元年11月24日,1989,p.17。
8　会津八一「『鹿鳴集』後記」、会津八一『会津八一全集　第十一巻』中央公論社,1981,pp.266-267。
9　槇田善衛「平野秀吉の偉業と会津八一について」、岡村鉄琴『新潟県文人研究第十六号』越佐文人研究会,2013,pp.52-53。
10　新潟縣尋常中學校『新潟縣尋常中學校第二年報』新潟縣尋常中學校,1896,pp.1-4。
11　前掲10,pp.16-17。

西脇又作の専門は倫理、歴史、地理であり、国語教師ではないことが明らかとなった。

③その他の記載について

年譜ノート[12]に「一八九五（明治二十八）年、新潟中學一年級に入學す。習字は高橋翠邨に学ぶ」とあり、この高橋翠邨に注目すると、「明治廿九年二月三十一日教諭高橋茂一郎[13]町村立長岡尋常中学校教諭（月俸参拾五圓）」とあり、八一が中学一学級（第一学年）の終わりに転勤したことが明らかとなった。また、「本學ニ於ケル入學志願者ノ数ハ弐百四拾七名ニシテ入學ヲ許可シタルモノ百六拾名ナリ」とあるように[14]、明治二十八年四月入学を希望して二四七名が志願したが一六〇名しか合格できず（倍率：一・五倍）、さらに入学生の五十一％は高等小學校四年修業中ノ者が占めていたことが明らかとなった。この一六〇名のうち五年後に卒業できた生徒は四十二名であることを考えると（表2）、卒業できる割合は二十六％となり、五年間学び続けることは難しいことが明らかとなった。

（二）会津八一が中学三学級（第三学年）の明治三十年度（明治三十年四月より同三十一年三月に至る一年間）の記載について[15]

①平野秀吉に関する記載について

「明治三十年六月二十日助教諭平野秀吉月俸金貳拾五圓ニ」とあり、昇給している。

②西脇又作に関する記載について

「明治三十年六月二十日教諭西脇又作月俸金四拾圓ニ」とあり、昇給している。

③小串隆に関する記載について

「明治三十年七月二十日栃木縣師範學校教諭小串隆教諭（月俸金四拾圓）ニ」とあり、小串隆は会津八一が中学三学級の夏に赴任し、平野秀吉より約二年遅れて赴任したことが明らかとなった。また、小串隆は国語教員免許状所有（三重県士族）とあり、学科は「国語」と記されていた。このことから、学科「国語」の教師は小串隆と平野秀吉の二名体制であることが明らかとなり、この体制は明治三十三年三月まで続いていることも明らかとなった。ちなみに、小串隆の赴任する前は吉川純三郎（地理教員免許状所有）が国語教師を代用しており、小串隆の赴任以前から国語教師二名体制が継続されていることが推察される。

（三）会津八一が中学五学級（第五学年）の明治三十二年度（明治三十二年四月より同三十三年三月に至る一年間）の記載について[16、17]

①平野秀吉に関する記載について

「明治三十二年十二月十九日學期試験ヲ結了ス」続けて「此日職務

12 前掲3,pp.499-500。

13 高橋茂一郎は高橋翠邨。当時、新潟縣尋常中學校教諭として漢文、歴史を教えていた。

14 前掲10,pp.19-20。

15 新潟縣尋常中學校『新潟縣尋常中學校第四年報』新潟縣尋常中學校,1898,p.2。

16 前掲2,pp.2-4。

17 前掲2,pp.45-49。

勉励ノ故ヲ以テ慰労トシテ教諭平野秀吉拾壹圓（略）給與セラル」とあるように、平野秀吉は慰労金を受け取っている。また、平野は教諭と記載されており、明治二十九年度および明治三十年度の記事概要に平野が助教諭から教諭に昇進したという記載がないことから、おそらく明治三十一年度中に教諭になったものと推察される。これは小泉孝氏の調べによる[18]、明治三十二年二月十日の教諭昇進と一致しており、平野が明治三十一年に文検（中等学校教員資格取得のための文部省検定試験の略称、合格すると尋常師範学校、尋常中学校、高等女学校の教員になることができる資格試験）で漢文科と習字科に合格し、中学校の学科「漢文」「習字」を教えることができるようになったことと関係する。また、「明治三十三年二月十二日教諭平野秀吉月俸参拾五圓二増俸ス」とあり、給与が上がったことがわかる。さらに、「明治三十三年三月二十日（略）教諭平野秀吉富山縣へ出向ヲ命セラル」続けて「二十二日教諭平野秀吉富山縣第三中學校教諭（月俸金四拾五圓）ニ轉任ス」とあり、平野秀吉は明治三十三（一九〇〇）年三月二十日に富山県へ出向させられ、二日後に富山県第三中学校教諭に転任させられた。このことから、小泉孝氏による「平野秀吉が明治三十二年三月に富山県第三中学校に赴任した」[19]という記載は誤りで、明治三十三（一九〇〇）年三月の会津八一の卒業とともに平野秀吉も異動していることが明らかとなった。

②西脇又作に関する記載について

「明治三十二年十二月十九日學期試験ヲ結了ス」続けて「此日職務勉励ノ故ヲ以テ慰労トシテ教諭西脇又作金拾圓（略）給與セラル」とあり、平野秀吉と同様に慰労金を受け取っている。また、「明治三十三年三月二十二日教諭西脇又作月俸金五拾圓二増俸依願本職ヲ免シ」とあり、西脇又作は明治三十三（一九〇〇）年三月二十二日に退職したことが明らかとなった。

③小串隆に関する記載について

「明治三十二年十二月十九日學期試験ヲ結了ス」続けて「此日職務勉励ノ故ヲ以テ慰労トシテ教諭小串隆金参圓（略）給與セラル」とあり、平野秀吉、西脇又作と同様に慰労金を受け取っている。

④その他の記載について

「明治三十二年九月十六日西蒲原郡彌彦尋常小學校訓導藤原紫朗助教諭（年俸金貳拾圓）ニ轉任ス」「明治三十三年三月三十一日助教諭藤原紫朗月俸金貳拾五圓ヲ給セラル」とあり、平野秀吉が転任する半年前に国語教師である藤原紫朗は弥彦尋常小学校から異動してきたことが明らかとなった。藤原紫朗は国語教員免許状所有（新潟県平民）とあり、学科は「国語」「習字」と記されていた。このことから、平野秀吉の転勤を見据えて藤原紫朗を転任させ、小串隆との二名で学科「国語」の運営にあたらせる中学校側の意図が感じられる。

（四）まとめ

前述の記載から次の四点が明らかとなった。一つ目は、平野秀吉の新潟県尋常中学校および新潟県中学校の勤務期間は明治二十八（一八九五）年九月十三日から明治三十三（一九〇〇）年三月二十二日であり、会津八一の卒業とともに、富山県第三中学校へ異動したこと。二つ目は、会津八一の「『鹿鳴集』後記」の記述にみられる中学

18 小泉孝『巻町双書第十七集　平野秀吉』巻町役場,1971,pp.89-92。
19 同18。

五学級（第五学年）の国語教師は小串隆と平野秀吉の二名であること。三つ目は、明治三十三（一九〇〇）年三月の卒業生は会津八一を含め四十二名しかおらず、この四十二名の卒業生に対し、小串隆と平野秀吉が学科「国語」（分科「講読、文学史」〔週二時間〕、「作文」〔週一時間〕）を教えていたこと。四つ目は、平野秀吉が小串隆より二年先に赴任しているため、若年であるが頼もしい存在の教師であること。以上が明らかとなった。

四．会津八一が中学時代に使用した国語の教科書について

会津八一が入学する一年前の学科課程表によれば（表2）、学科「國語及漢文」は第一学年から第五学年にかけて、毎週七時間が当てられ、授業は分科「講読、作文」を行っている。第二学年、第三学年で使用する教科書については、遠藤國次郎、鈴木重尚著「日本文典教科書」（新潟櫻井書店版）〔明治二十七（一八九四）年十一月五日印刷、十一月十二日発行〕が挙げられるが（表3）、会津八一（明治二十八年四月入学生）は「日本文典教科書」ではなく後述の「実用文典」を使用した可能性があることが明らかとなった。「日本文典教科書」の著者の一人である遠藤國次郎は、新潟県尋常中学校の国語教師であり、明治二十五年六月から明治二十九年四月まで勤務し、皇典講究所卒業で国語教員免許状所有（山梨県平民）、学科「国語」「習字」との記載がみえる[20]。もう一人の著者である鈴木重尚は、新潟尋常師範学校教諭である。

小泉孝氏の調べによれば[21]、平野秀吉は明治二十八年に「実用日本文典」（東京・吉川弘文館）を出版したとしているが、その経緯は次のとおりである。「秀吉が内野校（現、新潟市立内野小学校）在勤中、文検合格を目指して勉強しているうちに、的確な国文法の必要を感じ、自分なりの文法論を打ち立てて刊行したもの」であり、さらに「文部省試験検定の面接のおり、この受験生が『実用日本文典』の著者であることがわかり、試験官が驚いたということも無理はなかった」[22]とあることから、文検受検のための勉強から生まれた書籍で、文部省などにも認められた内容であったことが推察される。「実用日本文典」の詳細を調べると、題名は「実用日本文典」ではなく、「実用文典」であることが明らかとなり、著者は遠藤國次郎、平野秀吉、田中勇吉で、明治二十八（一八九五）年七月十一日印刷、同年七月十六日発行で、発行者は林平次郎（東京市日本橋区通三丁目六番地）、印刷者は松本義弘（東京市京橋区弓町十三番地）、発売所は吉川半七（東京市京橋区南伝馬町一丁目十二番地）、松村九兵衛（大阪市心斉橋南一丁目）、櫻井産作（新潟市本町通）であることが明らかとなった。著者の遠藤、平野は紹介の通りであるが、田中勇吉に関しては平野秀吉が新保西水（新潟尋常師範学校教諭、現 新潟市西蒲区出身）の五十回忌記念誌刊行にあたっての文章の中で「私は、先生の愛弟子なる田中勇吉君等の多くの方々と、親友関係を以って相交わっていた（略）」とあり[23]、田中勇吉は文中の「先生」、すなわち新保西水の愛弟子であることが

20 同11。

21 前掲18.pp.38-39,89-92。

22 前掲18.pp.8-9。

23 新保正樹『追想　新保正典・磐次・寅次父子』新保正樹,1997.p.98。

明らかとなった。さらに、新保西水による「日本文典」の草稿が存在することから[24]、「実用文典」は明治二十六（一八九三）年に没した新保西水の学問的成果も盛り込まれているものと推察される。田中勇吉に関する紹介文を次に示す[25]。「本名正厚、字は子方、通称勇吉、晩年象二郎と改めた。墨軒の他、無常庵主人・木剣生と号す。父は田中勇八、母は桑山（新潟市西蒲区桑山）・神田氏の娘。曽根生まれの漢詩人、能書家。遺稿『南窓吟嘯』あり。曽根銀行を起こした実業人でもあり、晩年札幌に移り没す〔元治二（一八六五）年から昭和十四（一九三九）年〕」。また、「実用文典」刊行（明治二十八年七月十六日）の二ヶ月後の九月十三日に、平野秀吉が新潟県尋常中学校嘱託に採用されることから、平野の採用にあたっては共著者で同校助教諭遠藤國次郎の推薦等があったことが推察される。ちなみに、遠藤は明治二十九（一八九六）年四月に退職しており、平野とは半年間のみの付き合いとなる。

平野秀吉が尋常中学校に採用されたことにより、第二学年ではじめて使用される「文典」の教科書（表3）は、「日本文典」から「実用文典」に変更され、会津八一は「実用文典」を使用して、その著者平野秀吉から直接教えを受けたことが推察される。「実用文典」の目次を挙げれば、「第一編　聲音、第二編　言語、第三編　文章」であり、第二編はさらに「第一章　体言、第二章　用言、第三章　助辞」から

[24] 岡村鉄琴『新保正與の文人像について』平成二十四年度西蒲区ふるさと再発見　講演会資料（平成二十四年十一月二十四日、新潟市西川多目的ホール）,2012,pp.9-10。

[25] 西川町文化協会『西川町文化協会創立二十周年記念　西川町を中心とする西蒲原郡ゆかりの文人』西川町文化協会,2002,p.48。

なり、緒言には「一　（略）本文典ハ古文ヲ講スルガ如ク専門ノモノナラズシテ専ラ時文ヲ作ルニ供フルコトヲ目的トセルヲ以テ記紀万葉其他古代ノ専有物ナル古語ヲ省略シ（略）。一　例証ハナルベク和歌ヲ避ケテ俳句普通文、日用文等ヲアゲ実用ニ便セリ。（略）」とあるように、日常生活で使用する文章について学ぶことを目的としている。この教科書はその内容から学科「国語」の分科「作文」の授業（表4）で使用されたと考えられる。

会津八一の中学五学級（第五学年）に注目すると（表4）、科目「国語」は毎週三時間が当てられ、分科「講読、文学史」に週二時間、分科「作文」に週一時間が当てられている。会津八一著の「『鹿鳴集』後記」によれば[26]、「明治三十二年四月、中学五学級に進み、国語教科書として課せられる三上、高津の『日本文學小史』の中に、作例として挙げた記紀萬葉の古歌を読むに及び」とあるように、「文学史」の授業で、「日本文學小史」を教科書に用いたことは明らかである。「日本文學小史」は明治二十六年三月二十七日に初出版され、明治三十一年三月十五日に八版となり、著者は三上参次、高津鍬三郎で金港堂書籍株式会社が発行印刷しており、上下二巻からなる。会津八一が中学五学級（明治三十二年四月から三十三年三月）で使用し、万葉集と良寛さまを結びつけた教科書は八版「日本文學小史」上巻の「第四章　奈良時代の和歌・・萬葉集・・」であると推察される。

五．会津八一と中学時代の恩師平野秀吉について

平野秀吉の死後、出版された「良寛と万葉集」（東京・文理書院）

[26] 同8。

の推薦文（昭和二十二年十一月二十一日「夕刊ニイガタ」）で、平野秀吉との関係を次のように紹介している[27]。「（略）。われわれ越後人が良寛さまと万葉集とを一度に勉強することができてありがたい本と云わなければならない。平野さんは明治廿八年に私がまだ十五歳で中学一年生の時に作文を教えてくれられた先生でそのころは、先生も随分若い先生であったが、若い頃から非常な勉強家で、また親切な教師であった。（略）」とあり、良寛さまと万葉集が結びついていることと、会津八一は平野秀吉の作文の授業を受けたことを紹介している。文面から推察すると「私がまだ十五歳で中学一年生の時に作文を教えてくれられた先生」とあることから、十五歳の時に作文を習ったと解釈してしまうが、そうではない。前述から分かるように、学科「国語」の教師は二名体制であり、会津八一が入学して以降、平野秀吉が二名の教師のうちの一名であり続けたことを考えると、「中学一年生の時から『ずっと』作文を教えてくれられた先生で」とする方が現実的であると考えられる。すなわち、会津八一は「作文」を平野秀吉に習い、文章表現の基礎を身に付けたことが推察される。

会津八一が平野秀吉から「習った」という証言を見つけたので次に紹介する。出典は平成十二（二〇〇〇）年七月二十四日に、巻町良寛会会長の江端一郎氏が巻公民館（現、新潟市西蒲区）で行った町民講座「良寛と会津八一」の講演録[28]である。

（略）。私が会津先生とは一度会っているのです。というのは昭和二十二年十一月一日でございます。当時斎藤順作先生を会長にして、私たちグループが作った文化会がございました。その文化会で会津先生を招き、当時の農協の広間で講演会をやったのです。

そのとき私が司会を仰せつかったのです。講演内容の詳しいことは忘れましたが、要するに戦争には負けたけれども自主性の確立ということを図らなければならない点を強調されました。丁度そのとき妙光寺で、巻町出身者の遺作展を開いておりましたので、講演を終えてからご案内しました。

巻町にはやはり相当の方がおられたので、遺作がたくさん並べてありました。会津先生は感心して見ておられましたが、見ていくうちに短冊だったか色紙だったか忘れましたが、平野秀吉先生の書があった。先生はそれに目をとめられまして、「おや、平野秀吉先生はこちらの方か？」と言われましたので「はあ、そうです。先生、ご存じですか？」と聞きますと、「うん、俺の先生だった」。「どこでお習いになったのですか？」と言いましたら、「新潟中学へ入ったとき平野先生から習ったのだよ」と言われました。私もそれにはびっくりしました。巻町の人がね、平野秀吉先生のことを忘れているのに会津先生は知っておられたのです。

そして平野先生が亡くなられた直後出たのですけれども、「良寛と万葉集」という本が、あの戦後の出版困難な、紙不足の時代に出ておるのです。実は私はその本を平野秀吉の教え子の小泉孝先生から頂戴し、大事にもっておりますけれども、その中に会津先生が序文を書いておられます。会津先生のことですから「平野さん」といっているのですが、「あの方はこうこう」ということを書いておられます。

そんなことから私は、「ああ、やはり巻町との因縁があったのだなぁ」

27 平野秀吉『良寛と万葉集』文理書院,1966（2版）,pp.1-4,276,277。
28 江端一郎『良寛と会津八一』巻町良寛会,2000,pp.15-16。

ということを痛感するのでございます。（略）。

さらに、会津八一と平野秀吉の関係を示す記事を見つけたので次に紹介する[29]。これは旧板倉村の有恒高等学校（現、上越市板倉区）で開催された増村度次翁追悼講演会の講演内容を吉池進氏が速記した内容である[30]。

昭和二十二年十一月十三日、有恒学舎主増村度次翁の追悼講演会に臨んで一場面の講演をされて居る。左はその時の私自身の速記である。「（略）。今朝出かけに貰った書物を汽車の中で読もうと思って持参して参りましたが、それは遂い最近まで高田師範学校で教えておられた平野さんの著書で、平野さんは亡くなられたのは、今年ですが、貰う時によかったら賞めてくだされというので読まない中から約束してもらいました。平野さんは私が諸君位の頃、新潟中学一年の時の作文の先生で、作文を教えてもらった方でありますが、私より七つ位年上であった様に思います。私が小学校を終って中学へ入った時、一番始めに作文を教わった先生であります。それからずっと学問を続けて居られた様であります。私は作文の点がよかったので、（笑声）その書物を読んで色色と思い出すことが多かったのであります。私はこの学校に居りました頃は一番若い先生であり、私一代のことを考えてみても、古い事になるが過ぎ去ると矢の如し夢の如しという感がするのであります。（略）。」

29 前掲4,p.311。
30 前掲4,1963,p.809。

以上述べてきたように、会津八一は中学校時代に平野秀吉から学び、影響を受けたのは明らかである。特に、増村度次翁の追悼講演会で平野秀吉との関係を聴衆に披露したのは、平野秀吉が地元（上越地方）の名士であることを裏付けているように思える。さらに、講演中で聴衆の笑いを誘った「私は作文の点がよかったので」にあるように、中学時代における八一の学年試験「作文」の点数は「第一学年が七十二点、第二学年は七十点、第三学年は八十点、第四学年は八十二点、第五学年は七十点」であり[31]、平野秀吉を回想しながら聴衆に語りかけている姿が目に見えるようである。また、平野秀吉著「良寛と万葉集」の推薦文にもあるように、「良寛さまと万葉集とを一度に勉強することができてありがたい本」としていることから、平野秀吉を良寛および万葉集の研究者として高く評価しているとともに、「親切な教師」と表現していることから教育者としても高く評価しているといえる。会津八一が平野秀吉を回想する起点となったのが妙光寺（旧巻町、現新潟市西蒲区）で行われた、巻町出身者の遺作展（昭和二十二年十一月一日）だとすると、その後の平野秀吉著「良寛と万葉集」推薦文の依頼（昭和二十二年十一月十三日）、「夕刊ニイガタ」推薦文掲載（昭和二十二年十一月二十一日）と、わずか二十日あまりの間で、連続的に起きていることが明らかとなった。

余談ではあるが、『會津八一伝』の「第二章　新潟県尋常中学校時代」において[32]、「新潟中学校時代の先生の恩師の中に高橋翠邨（茂一郎）、平野秀臣、松井喜三郎、三堀平五郎、木村良吉、滝沢又一の諸氏があっ

31 前掲4,1963,pp.94-96。
32 前掲4,p.84。

た」とあり、平野秀吉が平野秀臣と誤って記載されていることが平野秀吉の発見を遅らせる要因になったと推察される。ちなみに、『青山百年史』によれば[33]、松井喜三郎の担当は数学（教頭）で明治二十九（一八九六）年三月～明治二十九年十一月勤務（八一は第二学年）、三堀平五郎の担当は数学で明治二十五（一八九二）年六月～明治四十四（一九一一）年十二月勤務（八一は第一学年から五学年まで）、木村良吉の担当は図画・兵式体操で明治二十八（一八九七）年八月～明治三十三（一九〇〇）年十二月勤務（八一は第一学級途中から五学年まで）、滝沢又一の担当は英語で明治二十五（一八九二）年八月～明治三十（一八九七）年四月勤務（八一は第一・二学年）と記されている。

六．結び

会津八一と平野秀吉について調べを進めると、中学時代の会津八一における動向と平野秀吉との結び付きが明らかとなった（表5）。具体的には次の六点に集約される。一つ目は、八一の正式な履歴は「明治二十八年四月新潟縣尋常中學校入学」、「明治三十三年三月新潟縣中學校卒業」であり、入学した生徒の二十六％しか卒業できない状況にあったことが明らかとなった。二つ目は、会津八一の「卒業後ノ状況」は「国民英学会」とあり、明治三十三年四月に東京へ出た理由は国民英学会への入学であることが明らかとなった。三つ目は、中学時代の国語教師は二名体制であり、会津八一が中学一学級（第一学年）後半から卒業学年の五学級（第五学年）を通じて、平野秀吉から国語を教わったことが明らかとなった。四つ目は、会津八一が第二、第三学年で学んだ「作文」（学科「国語」の分科）の授業で使用した教科書は「実用文典」であり、その著者の一人である平野秀吉から直接「作文」の手ほどきを受けたことが推察される。五つ目は、会津八一が第五学年で万葉集に出会うが、そのきっかけとなった授業は「文学史」であり、そのとき使用した教科書は三上、高津の「日本文學小史」（八版）上巻であることが明らかとなった。六つ目は、会津八一が中学時代に平野秀吉から教えを受けており、恩師と呼べる存在であったことが推察される。

七．後記

これは「新潟県文人研究」第十六号寄稿の「平野秀吉の偉業と会津八一について」で明らかにできなかった会津八一の中学時代の動向に焦点を当てて論考し、不足部分を補う意図で作成した。しかしながら、八一の最初の勤務先である有恒学舎への採用経緯については、いまだ未解決のままである。これを解決する糸口として、『じょうえつ市の郷土史散歩』中に次の文章を見つけたので紹介する[34]。

（略）。本誓寺に泊まっている羽峯に接して、その学校開設論に動かされたもう一人に、針村の増村越渓度弘があります。越渓は故増村朴斎の父であることは申すまでもありません。（略）。不幸にして明治四年、二十六歳で早世しました。朴斎はわずか四歳です。（略）。（朴斎は）十五歳の時上京して、はじめて羽峯に会い、十七歳の時羽峯から

33 前掲1,pp.863-864。

34 池田嘉一・渡辺慶一『じょうえつ市の郷土史散歩』北越出版,1976,pp.64-73（著者罫線引）。

字を子徳また成徳という号をもらいました。（略）。明治十九年、朴斎が笈を負うて上京し、羽峯の門をたたき、また斯文校にも入学しました。在京中は羽峯の紹介で、当代一流の学者書家の講義に列し詩文の会にも出席しました。（略）。朴斎は帰郷後間もなく二十六年、恩師羽峯とはかり、上越文化向上のため、羽峯を指導者として、有終文社を組織し自ら盟主となって、社中の世話をしました。すなわち、上越の学者文人を集めて、漢学・国学・詩文などの研究をする会で、時には詩文を交換し、羽峯にその批評・訂正をこいました。羽峯は東京にありながら、有終文社のため、朱書加筆して一同を激励しました。当時の社中の顔ぶれには、渡部健蔵（魯庵）、小倉右馬、安西広文（翠軒）、北沢正誠（乾堂）、江坂熊蔵（香堂）、近藤良然、鈴木文照、山田愛山、小川則要、川上善兵衛、秋田実（孤舟）、武石貞松、飯塚春塘、片田九十八。その他数人ありますが、みな上越地方代表的な文人です。二十七年朴斎は亡父越渓の素志をつぎ、私立学校開設につき指示を求めたので、羽峯は文部省へ行き、学校建築掛長久留正道に面談して、その要領を朴斎に伝えました。翌年朴斎は全財産を投じて工事に着手し、二十九年四月十日いよいよ有恒学舎開校式のはこびとなりました。（略）。羽峯は有恒学舎のため良い教師を探し、国漢哲学の教師に小川則要を推薦しました。この人は旧仙台藩士の帝大出身で朴斎を助けて、学舎の中心となり、大正八年まで長く勤務した功労者です。（略）。

ちなみに、羽峯とは南摩羽峯のことで、詳細は『じょうえつ市の郷土史散歩』の「上越の教育界の恩人　南摩羽峯先生」にゆずりたい。ここで大切なのは、増村朴斎が明治二十六（一八九三）年に南摩羽峯とはかり、漢学・国学・詩文を研究する会として有終文社を組織し、その会員中に増村朴斎に、会津八一を有恒学舎の英語教師に推薦した[35]とされる「武石貞松」が含まれることである。このことから、武石の紹介文[36]でふれられていない上越地方との結び付きが明らかにできたと考えている。「武石貞松」の名は『會津八一伝』にも見られるので、次に紹介する[37]。「先生を増村度次に紹介したのは、越后の漢詩人武石貞松であった。先生若干にして越后俳壇に活躍し『東北日報』の俳句欄を担当していた時、武石貞松は同誌漢詩欄を受け持っていて知り合った仲である。当時の『東北日報』は大竹貫一、萩野左門が経営に当って居た」とあり、渡辺秀英氏の説[38]はこの『會津八一伝』から引用したものと推察される。続けて、「貞松は坂口五峰、増村度次と共に近代越後漢詩壇三傑の一人であって、五峰の詩が政治的色彩強く、朴斎が儒学的傾向に流れているのに対して、最も純粋に文学的香気に富んだ詩人であった。貞松が増村度次の英語教員の需めに応じ旧知の先生を推薦したのである」とあり、有恒学舎への採用の詳細な経緯を示している。しかしながら、會津八一研究家の近藤悠子氏は「私は早稲田大学坪内逍遙門下の宮井氏、中島半次郎氏の推薦によると考えます。その理由は、植村重雄編著『秋艸道人會津八一書簡集』の四十九頁、明治三十九年九月十四日伊達俊光宛書簡によると『宮井、中嶋の両氏よりは学舎行きの交渉を獲て、急に行李をとゝのへ候』とあるからです」とする。このことから、会津八一の有恒学舎への採用は、坪内逍遙門下生が関わっていることは間違いないが、武石貞松がどれく

35 渡辺秀英『會津八一の郷像』新潟日報社,1977,pp.343-344。
36 前掲9,p.55。
37 前掲4,p.277,281。
38 前掲9,p.54。

らい採用に影響を与えたのかを明らかにすることができなかった。今後の研究に期待する。

話しを平野秀吉にもどすことにする。平成二十六年二月十一日、槇神社（新潟市西蒲区巻甲）社号標脇に、平野秀吉の偉業と会津八一の関係を記した解説板（図1、2、3）が設置された。この解説板の解説文は次のとおりである。

郷土の碩学　平野秀吉

平野秀吉は明治六年（一八七三年）巻町に生まれ　巻小学校卒業後、独学で各種検定に合格、長く高田師範学校で教鞭をとる。高田師範時代の秀吉の教育は、信念に徹し、常に清新な気風を持ち、熱心に子弟の教育、指導に尽くした。その教えは高く評価されている。

明治二十八年九月から三十三年三月まで勤務した新潟中学校での教え子の一人に歌人の会津八一がおり、後に秀吉著『良寛と万葉集』を敬慕あふれる筆致で高く推奨している。

秀吉は明治三十四年四月から昭和九年三月まで高田師範学校教諭として高田の地に居を構え、昭和二十二年西城町の自宅で逝去するまで高田の人であり続けたが、故郷の巻町にも終生愛着を持ち続けた。

この社号標『槇神明宮』の字は大正八年に秀吉が書いたものである。国文学者としての秀吉の仕事は『全釋萬葉集昭和略解』に代表される。

体裁は『考異』『注』『解』『評』からなり記述は平明さに徹し、万葉集の全体像の大衆化を図った。草稿は（旧）巻町郷土資料館に眠ったままである。

平成二十六年二月十一日　記

この解説板の設置により、新潟市民が平野秀吉と会津八一と旧巻町（現、新潟市西蒲区）の関わり合いを発見する重要な手がかりの一つとなると思われ、たいへん有り難い事業であったと感じている。なお、この設置にあたっては、江端完治氏、平野恒義・弓子夫妻（平野家親族）の献身なる働きがあったことを申し述べ、心からの敬意を表したい。

最後に、江端一郎氏の講演録はご子息江端完治氏よりご提供を頂くとともに、上越教育大学の川村知行教授、会津八一研究家の近藤悠子先生には、私の拙い文章を読んで頂くとともにご教示を賜わりました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

〈筆者・〒九五九―〇四一二　新潟市西蒲区桑山三一六〉

図１．槇神社社号標

図２．社号標脇解説板

図３．解説文

図１～３は、平成26年３月５日（水）槇田撮影。

表１．新潟縣中学校　明治33年３月卒業　生徒一覧
「第７回卒業」の卒業生は42名

卒業後ノ状況	姓名	郡市族籍	卒業後ノ状況	姓名	郡市族籍
第一高等學校	野上俊夫	新潟市　平民	自宅	長谷川轍	岩船郡　平民
自宅	高橋　謙	北蒲原郡　平民	高等商業學校	田崎義介	北蒲原郡　平民
第一高等學校	伊藤成治	中蒲原郡　平民	第一高等學校	笠原敏郎	南蒲原郡　平民
第一高等學校	保倉熊三郎	新潟市　平民	第四高等學校	小見寺二郎	北蒲原郡　平民
第二高等學校	野村精策	新潟市　平民	自宅	西村利雄	岩船郡　士族
小學校	須藤九郎	中蒲原郡　士族	自宅	蝶名林留三郎	南蒲原郡　平民
第四高等學校	富山單治	新潟市　平民	第一高等學校	澤　三四五	北蒲原郡　平民
第一高等學校	佐竹源三郎	中蒲原郡　平民	札幌農學校	逢坂信悉	中蒲原郡　平民
自宅	笠原宇一郎	中蒲原郡　平民	第一高等學校	高倉　功	西蒲原郡　平民
第四高等學校	舘　正三	西蒲原郡　平民	東京英語専修學校	眞嶋中太郎	北蒲原郡　平民
自宅	桂　逸策	中蒲原郡　士族	士官候補生	山内保次	新潟市　平民
国民英學會	會津八一	新潟市　平民	工業學校	石井左武郎	新潟市　平民
第四高等學校	野口政秀	中蒲原郡　士族	第一高等學校	長谷川温策	岩船郡　平民
自宅	小林貞三郎	中蒲原郡　平民	自宅	成田成治	南蒲原郡　士族
自宅	伊藤隆平	中蒲原郡　平民	一年志願兵	齋藤龍彌	岩船郡　平民
自宅	岩淵岩太	北蒲原郡　平民	第四高等學校	渡邊慶吉	新潟市　平民
東京法學校	時田清吉	北蒲原郡　平民	東京専門学校	野本静治	北蒲原郡　平民
自宅	豊嶋宇作	中蒲原郡　平民	自宅	中川　卓	佐渡郡　平民
第四高等學校	渡邊　轍	新潟市　平民	外國語學校	石高令太	新潟市　平民
自宅	神原恒三郎	岩船郡　士族	士官候補生	小野塚寛平	中蒲原郡　平民
自宅	櫻井　馨	新潟市　士族	第四高等學校	阿倍邦衛	中蒲原郡　平民

引用文献

新潟縣新潟中学校『新潟縣新潟中學校第六年報』新潟縣新潟中学校,1900,pp.58-59。

表2. 八一入学1年前（明治27年4月から明治28年3月）の新潟縣尋常中學校における学科課程表（抜粋）

學科	毎週時間	第一學年	毎週時間	第二學年	毎週時間	第三學年	毎週時間	第四學年	毎週時間	第五學年
國語及漢文	7	講読 作文	7	講読 作文	7	講読 作文	7	講読 作文	7	講読 作文

引用文献

新潟縣中學校『新潟縣尋常中學校第一年報』新潟縣尋常中學校,1895,p.10。

表3. 八一入学1年前（明治27年4月から明治28年3月）の新潟縣尋常中學校における教科書及参考書一覧（抜粋）

學科	第一學年	第二學年	第二學年	第四學年	第五學年
國語及漢文	普通　國文 かなつかひ　教科書 日本　外史	邊見氏 　國文中學読本巻ノ一 文章　規範 遠藤氏 　日本文典　教科書	邊見氏 　國文中學読本巻ノ二三 唐宋八大家文 遠藤氏 　日本文典　教科書	邊見氏 　國文中學読本巻ノ四 班馬史鈔 枕ノ雙紙	高津鍬三郎氏 　日本文學小史 孟子

引用文献

新潟縣中學校『新潟縣尋常中學校第一年報』新潟縣尋常中學校,1895,p.23。

表4. 八一第5学年時（明治32年4月から明治33年3月）の新潟縣中學校における学科課程表（抜粋）

學科	毎週時間	第一學年	毎週時間	第二學年	毎週時間	第三學年	毎週時間	第四學年	毎週時間	第五學年
国語	4	講読　3 文法 書取 作文　1	4	講読　3 文法 書取 作文　1	4	講読　3 文法 作文　1	4	講読　3 文法 作文　1	3	講読 文學史　2 作文　1
漢文	3	講読　3	3	講読　3	3	講読　3	3	講読　3	3	講読　3

引用文献

新潟縣新潟中學校『新潟縣新潟中學校第六年報』新潟縣新潟中學校,1900,p.26。

表5. 平野秀吉の略歴と会津八一の関係（改訂）

西暦（号年）	平野秀吉 年齢	平野秀吉 事項	会津八一 年齢	会津八一 事項
1873年（明治6年）	1歳	6月5日、西蒲原郡巻村290番地戸に平野兵吉長男として生れる。		
1875　8	3	10月17日、弟亥作誕生。		
1879　12	7	6月5日、西蒲原郡巻小学校入学。		
1881　14	9		1歳	8月1日、新潟市古町通り5番町14番戸に生まれる。父、政次郎。母、イク。父は越後の豪農市島家の一族、亀塚市島家を継いだ助次郎の三男。のち会津家の養子となりイクと結婚。母は新潟市古町料亭会津屋の娘。三男四女あり。八一は二男。
1885　18	13	10月、西蒲原郡巻小学校授業生。	5	
1886　19	14	3月26日、西蒲原郡巻小学校卒業。	6	
1887　20	15	4月、巻小学校を退職、西蒲原郡国上村国上小学校授業生。	7	新潟市西堀小学校1学級に入学。
1888　21	16	4月、西蒲原郡弥彦小学校授業生。	8	新潟市西堀小学校2学級となる。
1890　23	18	11月1日、尋常科教員免許状受領。	10	新潟市西堀小学校4学級となる。
1891　24	19	2月26日、西蒲原郡灰方尋常小学校（現、燕市川前小学校の前身）訓導兼校長（18歳）。9月、歌集「つれづれ草紙18巻」。	11	新潟高等小学校1年級に入る。
1892　25	20	3月、高等科教員免許状受領。8月、東京において大日本教育会の1ヶ月にわたる夏期講習会受講。9月27日、西蒲原郡内野尋常小学校。10月、随想録「松風」「上京日記」執筆。12月27日、無試験検定により新制の小学校本科正教員免許状受領。	12	新潟高等小学校2年級となる。
1895　28	23	7月16日、「実用文典」出版（東京吉川弘文館）。文部省検定試験合格、尋常師範学校、尋常中学校、高等女学校の国語科教員免許状受領。9月13日、新潟県尋常中学校授業嘱託。	15	新潟県尋常中学校1年級に入学す。習字は高橋翠邨に学ぶ。「自由新報」に投書して論戦したることあり。問題は弓術に関すること。
1896　29	24	2月25日、同校助教諭。	16	尋常中学校2年級となる。
1897　30	25	3月29日、水谷コトヂと結婚。新居は新潟市学校町通り2丁目。	17	尋常中学校3年級となる。上級生のクラス会雑誌「芝蘭」に投書して存在を認めらる。7月下旬、急性脚気を病み、10月まで臥立たず。
1898　31	26	6月3日、文部省検定試験合格、師範学校、尋常中学校、高等女学校の漢文科、習字科免許状受領。	18	尋常中学校4学級となる。7月下旬、会津サイ病死す。その養子となりて相続す(7月27日付届出)。9月、新潟中学校へ短艇部脱会願い提出す（9月9日付）。
1899　32	27	2月10日、新潟県尋常中学校教諭。4月1日、新潟県中学校教諭。	19	早春より俳句を始む。4月、新潟県中学校5年級となる。記紀万葉（古事記、日本書紀、万葉集）の古歌を読むに及び、強き感動を覚ゆ。6、9、10、11月の「ほととぎす」に投句し掲載さる。7月、新潟へ尾崎紅葉来る。面会す。のちに紅葉より鉄杵という俳号を贈らる。同月下旬より「蛙面房俳話」を「東北日報」に連載す。8月、坪内逍遙、新潟に来り改良座にて講演。それを傍聴し、逍遙の態度と雄弁とに感動す。同月下旬、俳話「をかし記」と「東北日報」に掲載。
1900　33	28	3月22日、富山県第三中学校（現、富山県立魚津高等学校）教諭。長男秀夫誕生。	20	1月、「蛙面房俳話」を「東北日報」に掲載。新潟県中学校を卒業。4月、国民英学会入学のため東京に出づ。兄、友一と神田神保町に下宿。6月、下谷根岸に正岡子規を訪う。牛込に尾崎紅葉を訪うも不在。7月、脚気を病み、新潟に帰る。
1901　34	29	4月8日、新潟県高田師範学校教諭。作事町（現大手町）に住す。	21	何となく病身につき何をするともなく俳句に遊ぶ。「東北日報」と「新潟新聞」との俳句選者となる。（略）。
1902　35	30	3月8日、長女愛子誕生。12月28日、「国語声音学」出版（東京・国光社）。	22	（略）。4月、東京専門学校高等予科第1期に入学。長谷川楡、阿倍邦太郎と共に、東京市牛込区原町3丁目69番地、玉川温徳方に下宿。（略）。
1904　37	32	3月12日、高田師範学校舎監兼任。富士登山。9月12日、二男不二夫誕生。9月14日、父兵吉死亡。	24	
1906　39	34	11月30日、二女下枝誕生。	26	7月15日、早稲田大学文学科を卒業。卒業論文「キーツの研究」。8月1日、帰省。（略）。9月12日、新潟県中頸城郡板倉村の有恒学舎（現、県立有恒高等学校）に、英語教師として東京より赴任。
1907　40	35		27	4月、「新潟新聞」の俳句の選者となる。5月2日より6日、佐渡へ修学旅行す。（略）。10月、信州柏原に一茶の跡を訪う。11月9日、直江津郊外郷津の和倉楼に泊る。22日、再び同地に泊る。
1908　41	36	白馬岳登山。	28	2月、一茶直筆の「六番日記」を発見す。（略）。4月、越後国分寺の五智如来をみる。5月、西頸城郡の海岸に修学旅行。同月、日本天文学会会員となる。（略）。8月4日夜、大阪着。初めて奈良地方を旅行し、和歌20首を詠ず。（略）。のち、大阪、京都を経て、14日、金沢にいたる。高岡。伏木より海路直江津に出、針村に帰着。9月4日、新潟市大火のため、生家会津屋罹災。20日、妹、琴を針村によぶ。10月下旬、郷津の和倉楼に泊る。11月、「花環につきて」を「新潟新聞」に4回連載。
1909　42	37	1月12日、奏任待遇。7月4日、三女チヨ子誕生。	29	1月、「我が俳諧」を「新潟新聞」に掲載。3月、俳句結社、玻璃金社を主催す。3月29日、高田、直江津に行く。4月10日、11日、有恒学舎創立14周年を記念し、校内において新古俳諧師狂歌師の書画展覧会を開催す。同月、「高田新聞」の俳句選者となる。「俳句を葬るにつきて」を「高田新聞」に3回連載。5月16日、佐渡へ修学旅行のため、新井駅に集合、直江津へ。24日、直江津着。5泊6日の予定が8泊9日になる。夏、越後の燕に行く。
1910　43	38		30	2月、「地方的特色をして鮮明ならしめよ」を「高田新聞」に3回連載。7月、田中忠太とともに米山に登る。8月下旬、赤倉、苗の湖、芙蓉湖に遊ぶ。有恒学舎を辞任。9月1日、上京。早稲田中学校に英語教師として転任。（略）。
1911　44	39	10月30日、三男多聞誕生。秋より、現上越市西城町3丁目7番地（不二夫宅）。		
1913　大正　2	41	5月19日、長男秀夫死亡（享年14才）。		
1915　4	43	4月10日、母ソチ死亡。5月15日、「緩り方教授の根本的研究」出版（東京・六合社）。6月20日、同窓会校友会主催勤続十五年謝恩表彰。		
1916　5	44	2月2日、四女幸子誕生。		
1919　8	47	3月28日、高等官六等待遇。		
1921　10	49	8月5日、高等官五等待遇。8月6日、依願退職。9月30日、叙勲六等瑞宝章授与。9月30日、新潟県高田師範学校授業嘱託。		
1923　12	51	8月、「万葉集全釈」第一次原稿脱稿。		
1924　13	52	10月3日、新潟県史跡名勝天然記念物調査委員。		
1927　昭和　2	55	7月15日、「日本アルプス登山案内記」出版（東京・斯文書院）。		
1928　3	56	10月20日、「山嶽歌集駒草」出版（東京・斯文書院）。		
1929　4	57	10月10日、「唐詩選全釈」出版（東京・東洋図書刊行会）。		
1933　8	61	7月、還暦祝賀雨飾山登山。		
1934　9	62	3月31日、高田師範学校授業嘱託依願退職。10月17日、高田師範学校同窓生による胸像除幕式ならびに謝恩会。		
1939　14	67	6月10日、「山嶽の歌高嶺いばら」出版（木曜会）。		
1942　17	70	10月4日、古稀祝賀黒姫山登山。		
1943　18	71	胸像供出。12月、「全釈万葉集昭和略解」完稿。		
1946　21	74	5月6日、弟亥作死亡。6月、門下生主催金婚式祝賀（高田市大町中学校体育館於）。		
1947　22	75	5月27日、脳溢血にて倒れ、同日死亡。10月5日、「良寛と万葉集」出版（東京・文理書院）。12月、「良寛と万葉集」出版記念講演会。		
1948　23		10月9日、妻コトヂ死亡。		
1951　26		3月19日、胸像再建除幕式。		
1966　41		9月15日、「良寛と万葉集」増補改訂版出版（文理書院）。11月22日、「良寛と万葉集」出版記念講演会。		

引用文献

小泉孝『巻町双書第17集　平野秀吉』巻町役場,1971,pp.89-92。
会津八一『会津八一全集　第12巻』中央公論社,1984,pp.501-507。
新潟県立新潟高等学校『青山百年史』新潟高等学校創立百周年記念実行委員会,1992,pp.863-864,894-897。
新潟縣新潟中學校『新潟縣新潟中學校第六年報』新潟縣新潟中學校,1900,p.3,58。

二重線：著者訂正。